プリキュアの世界にTS転生した比企谷八幡がプリキュアになる話

のうち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通事故で死んでしまった八幡がプリキュアの世界に転生その世界の雪ノ下陽乃とプリキュアとして戦う

目次

第一話私の相棒は魔王 ―――― 1
初めての戦闘 ―――― 6
第三話大地の精霊パワーアニマル ―――― 9
第4話新たな敵は八重の妹 ―――― 17
第5話小町対デューク、狼鬼の正体は誰だ！ ―――― 22
第6話シルヴァ変身！、キュアグラディウス ―――― 25
オリキュアオールスターズ
オリキュアオールスターズその1戦士たちとの出会い ―――― 34
オリキュアオールスターズ②天使の参戦 ―――― 40
オリキュアオールスターズ③プリキュア敗北、勝利のヒントは合体!! ―――― 44
オリキュアオールスターズ④終決、神の力 ―――― 51
第7話タイムスリップあってわならない奇跡！、ホーリーナイトプリキュア対砂漠の使徒プリキュア新世代誕生の秘密 ―――― 55
第8話力をなくした先輩と変身した後輩 ―――― 60

第９話陽乃の後輩Ｓ☆Ｓ ―――― 64
第１０話シルヴァの後輩フレッシュプリキュア、対面する二人はプリキュア 70
第十一話グラディウス対イース！揺らぐイースの想い ―――― 74
第１２話遭遇したの魔法使いとおまわりさん ―――― 77
またまた転移、今度は別の世界に転移した。 ―――― 81
１４話 ―――― 84
第１５話 ―――― 87
１６話 ―――― 93
１７話カオス対フェンリル ―――― 96

第一話私の相棒は魔王

八幡「うんっ？ここは？」
八幡は何もない白い空間にいました。
？「お目覚めになりましたか。」
八幡「天使？」
？「何をいってるんですか、あなたはっ!?、私の名は、アルス、貴方がこれから転生する世界を担当する神です。」
八幡「転生、神？」
アルス「はい、貴方は本来の歴史においてあの場面で死ぬことは、なかったのですが、こちらの手違いにより、貴方は死んで
しまいました。」
八幡「死んだ。か最後の最後までボッチかよ。」
アルス「そこでお詫びといってはなんですが貴方にはある世界に転生してもらおうと思います。世界の都合上、貴方には女の子になってもらうことになりますけど。」
八幡「ちなみにどこにいくんですか。」

アルス「プリキュアの世界です。」
八幡「行きます‼‼」
アルス「では早速」とアルスは紐を引く
そして、俺は地面にあいた穴から、落ちるそして、無事に転生して１１年２歳のときに転生したから１３歳になった私、比企谷八幡もとい、比企谷八重は、
幼馴染みの雪ノ下陽乃と遊んでいた。
まさか、あの魔王と幼馴染みの親友の関係になるとは思わなかった。
救われたのは、雪ノ下家は、この世界では、一般家庭だ、しかしどの世界にきても
陽乃は、陽乃なのだ。
陽乃「八重、どうしたの今度は八重の番だよ。」とこいつは、最初にあったとき、前世の雪ノ下さんとにたようなものをかんじ
ただがある日を境に、まるで男の彼氏といるようなかんじに接してくるようになる。
そして今は絶賛、夫婦ごっこ中なのだ。
ちなみに、私の方が夫らしい。
ちなみに今は食事の食べさせあい俗にゆう
あーんってやつをやらされている。
えっ、中１にもなっておままごとですかだって、これは、私は夫婦ごっこ等といって

いるがこれは昼休みの時間帯に行われているのだ。
そして、こいつは、本当に私と夫婦になるつもりらしく、進路希望に、八重のお嫁さん等と書くくらいの重傷だったり。とそんなこんなで放課後、
八重「陽乃、お前はまたか、はぁー」
陽乃「大丈夫、私達、両親公認でしょ。」
そういう問題では、ないと思うんだけど。
そして私達が歩いていると一人のおじさんを見かけた。
おじさん「お嬢さんがたちょうどいいところに、私は、ここで露店商をしているものなんだが、店をたたまないといけなくなってしまってね。最後に売れ残ったこのペンダントをもらってくれないか。」そのペンダントは、夫婦剣と呼ばれる剣のかたちをしたペンダントだった。
陽乃「いいの、おじさん」
おじさん「かまわんよ。その方がよろこぶさこいつらも」
とペンダントを私達の首にかけ去ってしまった。
翌日の放課後、私達は久しぶりに寄り道をしている。なにか変な空間に迷い混んでしまったそして見知らぬおねえさんが話かけてきた。
「あなた達、私達悪魔のはった結界の中にいても平気なの。」とまわりを見回すとそこら

中に人が倒れていた。
「まあ、でもこれに耐えられるってことは、極上の魔力をもつ人間って事よね。」
と何処からか、鎌を釜を取りだし、襲いかかってくる。
私と陽乃は、走った。
でも、しばらく走ると回り込まれた。
「残念でした。ゲームオーバーよ。お嬢さん達」と鎌をふりあげる。すると私と陽乃のペンダントが光り、その光から頭の中に直接入ってきた言葉を私達二人は叫びながら、ペンダントをくっつける
八重・陽乃「聖なる輝きをこの手に、チェンジ、プリキュア!!、セイントあーっぷ!!!!」八重と陽乃の体を光が包み、西洋の騎士をイメージしたバトルドレスにかわり、八重は金髪、陽乃は銀髪に、かわり陽乃は髪型をそのまま、八重はサイドテールになる。
八重「光を司りし聖なる騎士!
キュアパラディン!!!!」
陽乃「風を司りし、聖なる騎士
キュアデューク!!!!」
八重「二人の騎士の聖なる力が、」
陽乃「悪魔の闇から光を拾う。」

八重・陽乃「ホーリーナイト・プリキュア」

初めての戦闘

下校途中、悪魔を名乗る存在に襲われた。
八重と陽乃、迫りくる悪魔の魔の手から二人を救ったのは、見知らぬ露店商より譲り受けたペンダントだった。
そのペンダントは二人を悪魔を浄化するとされる伝説の騎士プリキュアへと変身させた。
パラディン「なっ！、なにこれ？」
デューク「えっと、流石の私でもこれは予想外かな。」

悪魔「プリキュアだと‼、まさか、プリキュアはあのときに確かに、まさか新たな代の騎士が誕生しただと!?」
パラディン「何だかわかんないんだけど、
この格好の時はデュークって、呼んだ方がいいかな。」
デューク「そうだね。私もパラディンって呼ぶね。」
悪魔「プリキュアと言えど、今しがたなったばかりの素人等に負けるものか、ではお

嬢さんがたをいじめるのも飽きた、私にかわりこいつが相手をしよう。いでよ、暗闇獣‼‼」

暗闇のなかから暗闇獣が這いずり出てくる。そして悪魔は消えた。

パラディン「どうする。デューク？」

デューク「パラディンも、あのペンダントの光を浴びたとき、どう戦うのか頭の中に入ってきた。」

パラディン「デュークも、おんなじなのね。まっ、それなら話がはやい、あれを試してよう。」

デューク「いいね、ならやろっか。」

二人の右手は、手刀の形をとりその手にオーラが纏われる。

パラディン「受けてみな、聖拳の一撃。」

デューク「エクスカリバー‼‼」と二人の手刀の一撃は、結界の中の建物がまるごときり、暗闇獣の両手を切断した。

デューク「よし、今がチャンス！パラディン‼‼」

デューク「プリキュアの聖なる魂が、」

パラディン「悪魔の邪気を打ち払う。」二人は手を繋ぎ呪文を唱えると二人のオーラが

一つになり巨大な剣が召喚される。
二人「「破邪聖断剣!!!!」」
パラディン「一気に決めるぞ。」
デューク「いくよ!!!!」
二人「「邪気退散!!!!」」
そして暗闇獣は真っ二つになる。
二人「「プリキュア(私達)に断てぬもの無し!!!!」」
そして二人は戦いがおさまると変身がとけて、その場をおおっていた、やな気配が消える。
陽乃「あれはいったいなんだったんだろうね。」
八重「そうだな、でも関わってしまった以上、これで終わりなわけはない。」
陽乃「でも、くるなら返り討ちにするまでだよ。」
この二人のプリキュアが生まれたのは、世界にプリキュアの存在が確認される。2年前、ブラック、ホワイトと呼ばれるプリキュアが誕生する前のプリキュアの物語、二人はこれから壮絶な戦いが待っていることをまだ知らない。

第三話大地の精霊パワーアニマル

ここは、八重と陽乃の住むマンションで八重と陽乃は、昨日のことを話し合っていた。
八重「あれはいったいなんだったんだろうね。」
陽乃「悪魔とか、いってたけど。」
八重「てゆうか、あれをみてしまって無関係っていえないことくらいはわかってる。」
陽乃「それにあいつ私達のことプリキュアって言ってた。きっとこれからもなにかしら私達に関わってくるはず、私達も何かしら手をうたないと、この前の暗闇獣ってのも、この前も運よく倒せたけどこれからもああやって倒せるなんて思わない。」
八重「確かに力を手にいれてからそんなにたってない強い敵が現れたら私達じゃ、倒せないかもだしね。」
するとクローゼットが突然開く、なかを除くとなにか道のようなものができていた。
陽乃「なにこれ、？」
八重「なんだろ本当に」と二人は穴に近づくと穴は二人を吸い込んだ。
ここは天空島空に浮かぶ島だ。
？「ふっふんふん～今日もいい天気。」と

島の巫女アイラ鼻歌を歌いながら洗濯物をほしていると上から
八重「やぁぁぁぁ、危ない退いてーーーーーー」
陽乃「なんで私達落ちてるのーーーーーーーーーーー!!」
アイラ「えぇーーって」ひゅーーーっ
ドッーンと時すでに遅くアイラは二人の下敷きだ。
八重「うん重い」
陽乃「失礼ね。八重」
アイラ「重い」
二人「「誰が重いってっ、ゴラッ!」
八重「って、きゃ、ごめんなさい。」
アイラ「いえ此方こそ、女の子に対して失礼なことを申しました。」
陽乃「貴女は?」
アイラ「私は、アイラこの空に浮かぶ島、天空島の巫女です。」
八重「天空島」
アイラ「しかし、わかりません。なぜ貴女達二人が、この島に」
二人は事情を話した。
アイラ「なるほど、クローゼットからいきなり転移させられたと、つかぬことを聞き

ますが二人、最近悪魔に襲われたりとか、しませんでした。」
八重「確かに襲われて。」
陽乃「プリキュアってのに変身したのよ!それで敵の暗闇獣を浄化して倒したんだよ。」
アイラ「プリキュア、なるほど貴女達がここにきた理由がわかりました。ついてきて下さい。貴女達のパートナーになる精霊パワーアニマル達を紹介しますから」
陽乃「はぁーい」
八重「プリキュアについて詳しく知るチャンスかもね。」とアイラについてきて訪れたのは崖だった。崖の上には赤い巨大なライオンがいました。
アイラ「八重さんには、この子、天空島のリーダー、ガオライオンがパートナーです。」
ガオライオンが八重の前に来て匂いを嗅ぎ
そして吠えると同時に人の女性の姿に
ガオライオン「よろしく頼む、八重この姿の時はランドと呼んでくれ。」
とかわいい見た目になったランドをつれ次は森の方にいき、銀色の巨大な狼の前にきた。
アイラ「陽乃さんは、この子ガオウルフです。」先程のように陽乃の前にガオウルフが

来て雄叫びをあげると狼のコスプレを女性が衣装を纏って現れた。
ガオウルフ「よろしく陽乃、この姿のときはミラってよんでね。」
陽乃「よろしくミラ」
アイラ「お二人は天空島の伝説の騎士プリキュアになりましたそのプリキュアに代々受け継がれてきた獣皇剣を渡します。そしてパワーアニマル達のとの信頼の証、ガオの宝珠三個です。ガオライオンとガオウルフの宝珠は、あとであの子達から」
そして二人は五本の獣皇剣と宝珠を手に入れた。
そして天空島のゲートのある場所に通して貰った。そしてもときた場所に帰って来た。そして翌日の日曜日、一緒に暮らすことになった。ランドとミラの身の回りのものを揃えるために買い物に来ていた。そして昼食を取っていると、いきなり世界がどんよりした、空間に変わった。
八重「これって」
陽乃「まさか」
ランド「どうやらそのまさかのようだな。」
ミラ「ええ、悪魔の結界」
八重「陽乃！」
陽乃「うん！」

二人の意思に反応して輝き出した。ペンダントをくっつける。
八重・陽乃「聖なる輝きをこの手に、
チェンジプリキュア・セイントアップ!!!!」二人はプリキュアに変身する
パラディン「光を司りし聖なる騎士、キュアパラディン！」
デューク「風を司りし聖なる騎士、キュアデューク！」
パラディン「二人の騎士の聖なる力が！」
デューク「悪魔の闇から光を拾う!!」
パラディン・デューク「ホーリーナイト・
プリキュア!!!!」
悪魔「あら、お嬢さん達、ひさしぶりね。」
ミラ「あら、毎度毎度飽きないわね。シルヴァ、いいえ、シーちゃんって呼んだ方がいいかしら？」
シルヴァと言われた悪魔は動揺した顔で
シルヴァ「貴様ガオウルフ!!」
ランド「私も忘れては困るな、シーちゃん
。」
シルヴァ「ガオライオンもいるのか。まあ久しぶりに会ったんだ今日はたっぷりサー

ビスしちゃうわよ。」と三体の暗闇獣を出してシルヴァは消えた。三体は、四人に攻撃を仕掛けていく。

四人も対応していく、

ランド「2体は、私とミラに任せろ。」

パラディン「わかった。」そしてミラとランドは1体づつ暗闇獣をつれて離れていく。

そしてパラディンとデュークも、聖拳エクスカリバーでダメージを与えていく。

そしてランドとミラの相手とほぼ同時に、

敵を追い詰め、ランドは、ライオンファングで、ミラはハスラーロッドで相手に致命的なダメージを追わせる。

デューク「あの二人、人間の姿でも強い！

」

パラディン「負けてられないデューク、私達も」

デューク「オッケー！いくよ!!」

二人は手を繋ぐ

デューク「プリキュアの聖なる魂が！」

パラディン「悪魔の邪気を打ち払う!!!!」

パラディン・デューク「破邪聖断剣！」

パラディン・デューク「邪気退散!!!!」
と二人は暗闇獣を倒した。
シルヴァ「やるわね。今回はもうひとつおまけしてあげるわ。」
シルヴァが現れ手を振るうと
やられた三体の暗闇獣が融合し巨大な暗闇獣へと変わる。
シルヴァ「それじゃ、生きてたらまた会いましょう。」
パラディン「あんな敵、私達二人の力だけじゃ、倒しきれない。」
デューク「どうしたらいいの。」
ランド「私達の力を使う時がきたようだな。」
ミラ「えぇ、デューク、パラディン、昨日
アイラに宝珠貰ったでしょあの三つの宝珠と私達の宝珠をつかって、精霊王で戦うのよ。」
ランドとミラはそれぞれ赤と銀の宝珠を渡す
ランド「これが私達を、呼び出すための宝珠だ。獣皇剣にこれをセットしてパワーアニマルを召喚するのだ。」
そして私達二人はアイラに渡された。獣皇剣五つをそれぞれもち宝珠をセットする。
パラディン・デューク「百獣召喚!!!!」

そしてミラとランドはパワーアニマルの姿に空に虹の道が現れガオバイソン・ガオイーグル・ガオシャーク降りてくる。
パラディン・デューク「百獣合体!!!!」
パワーアニマル達が合体し、精霊王が誕生する
そして何処からか現れたソウルバードにのり精霊王に乗り込む
パラディン「ソウルドライブ!!!!、誕生!!!!ガオキング!!!!」

第４話新たな敵は八重の妹

デューク「ガオキング!?」
パラディン「コレがパワーアニマルの真の力?」
デューク「体に力が溢れてくる!」
パラディン「本当にパワーアニマル達と一つになっている感じね。」
ガオキングの力に驚く二人、ランドとミラは、二人に動かしかたを直接脳に送る。
デューク「それじゃ、やってみますか。」
パラディン・デューク「天地轟鳴スーパーアニマルハート!!!!!!!!!!」
暗闇獣は消滅する。そしてランド達はもとの姿に戻り、デュークとパラディンは変身を解除した。悪魔の結界が解除される。

八重「ふうー、今日もなんとかなったね。」
陽乃「そうだね。今日もなんとか勝った。」
ランド「とりあえず、家に帰ろ。」
ミラ「帰って腹ごしらえだ。」

とこれからしばらく、シルヴァとプリキュア達の戦いは、シルヴァが負け越していた。
そして
ここは魔界、悪魔の住む世界
シルヴァ「クソっ！」と拳を叩きつける。
？「シルヴァ、また負けてきたの。」
シルヴァ「うるさい！黙れ！」
？「そう怒らないでよ。」
シルヴァ「小町、あんたはぁぁ！!!!!」
小町「うるさいよ、これだからおばさんは
」
シルヴァ「誰がおばさんだ!!!!」
シルヴァは小町に拳骨を落とす
小町「イッター!!!!、酷いなぁ！」
シルヴァ「で、本当になんのよう？」
小町「小町考えたのなんでシルヴァがいっつも失敗するのか、自分の’’
：の後輩を傷つけたくないんでしょ！、自分は裏切って此方にきた卑怯者なのに！」
シルヴァ「黙れ！」

小町「そんなシルヴァに伝えるよ！、次から、小町が人間界で任務につくことになったから、つ・ま・り、シルヴァは役立たずってこと、キャァァァァッ！ハッキリと立場を教えてあげる、小町的にポイントたっかい！」小町はシルヴァのもとをあとにした。
小町が歩いていると呟く
小町「お姉ちゃん、やっと迎えにいける。
小町がお姉ちゃんを！、だから待ってってね。必ず行くから！」
病んだ瞳そう言った小町は人間世界へと、ワープした。
八重と陽乃は学校からの帰り道、世界が紫色に変わるのをみると
八重「また、シルヴァ！」
陽乃「本当に、もう‼」
そして暴れている悪魔を見つける。
陽乃「シルヴァじゃ、ない？」
八重「あの顔、何処かで？」
そして悪魔が此方に気づく
小町「お姉ちゃん！八重お姉ちゃん！」といきなり抱きついてきた
八重「まさか、小町！」
小町「そうだよ、一目みただけでわからなかったのは、駄目だけどちゃんと小町って

わかってくれたのは超ポイント高いよ！カンストしちゃうよ！」
八重「小町がなんでそんな格好をしているの、まるで、」
小町「悪魔みたい」
八重「！」
八重は驚くそしてその妹の笑顔の中の隠れた殺気に気付き、咄嗟に離れる。
小町「ばれちゃったか。やるねお姉ちゃん！、私ばかり見せてもしょうがないからお姉ちゃん達もプリキュアになりなよ。」
八重「小町！なんで、貴女はあのとき母さん達と」
小町「死んだはず？、答えは簡単私は、ある場所で見つけたこの狼鬼の仮面に眠っていた狼鬼と融合したことによって生き残ることができた。」
八重「小町、陽乃‼」
陽乃「変身だね。」
八重・陽乃「チェンジ・プリキュアセイントアップ！」
パラディン「光を司りし聖なる騎士、キュアパラディン‼」
デューク「風を司りし聖なる騎士、キュアデューク！」
パラディン「二人の騎士の聖なる力が！」
デューク「闇の中から光を拾う！」

パラディン・デューク「ホーリーナイト・プリキュア‼」
小町「ふーぅん」と小町が指を鳴らずそしてパラディンの背後から巨大な手が現れパラディンを捕まえようとする。パラディンはしつこく逃げ回る
デューク「パラディン！」とパラディンを助けようと飛び上がるが、もうひとつの現れた手により弾きかえされる。
小町「邪魔をするな、お姉ちゃんにはいよるこの害虫が‼」そしてパラディンは捕まって閉まった。
小町「さっ、此れであとは、お前を殺してお姉ちゃんを魔界に連れ帰って、私だけを視るように調教しないと。」
デューク「パラディンを連れていかせない」と小町に飛びかかるデューク、パラディンは、シルヴァの正体は、小町はいったいどうなるのか

第５話小町対デューク、狼鬼の正体は誰だ！

小町「さっさっと死んでくれないかな。私のお姉ちゃんとイチャイチャできないでしょ。」
と小町は呟きながら魔弾を発射する。
デューク「そっ！、でもパラディンは私と相思相愛だから！」
小町「嘘だ‼‼」
パラディン「デュークこんな時にへんな冗談言わないで‼‼」
デューク「ちぇッ！私は本気なのに！、とりあえず本当にパラディンは返して貰うから、きて、ハスラーロッド‼」
デューク「ショットモード！」
デューク「邪気玉砕！、破邪聖獣球‼」
デュークの放った三つの弾丸が弾きあい小町の額の狼の面に罅が入る。
小町は苦しみだした
そしてシルヴァが現れた。
シルヴァ「無様だな、小町！」

小町「シルヴァっ?、なんで」
シルヴァ「はぁー、貴女を助けたあげた存在を私の正体を忘れるなんて」とシルヴァは、姿をかえる
それは小町の面とそっくりの顔を持つ怪人にかわった
小町「狼鬼ッ!」
小町の拘束から解かれたパラディン
パラディン「狼鬼ッ!、小町を助けた存在!」
小町の面は完全に砕けて小町は気絶した。
そしてその破片は狼鬼に吸収される。
狼鬼「はぁッー!此れでこの体から離れられる。千年の邪気の力を完全に取り戻したぞ。」とシルヴァと狼鬼は分離する。
狼鬼は転移し、シルヴァと小町は、残された
そしてシルヴァと小町の体から悪魔の気配は消えていた。
ランドとミラ、そしてもう一人見知らぬ女性が現れた。
ランド「パラディン、デューク、すまない私達がもう少し早くついていれば」
ミラ「シルヴァは、狼鬼から千年の邪気から解放されたのね。」
変身をといた二人は尋ねる

陽乃「それで、シルヴァともう一人の人の関係教えてくれないかな。」

？「それは私から説明しよう。私はガオファルコン、人の姿の名はアレンだ。」

アレンはシルヴァと狼鬼がなぜあんなことになったのかを説明した。シルヴァは千年前のプリキュアで千年の前の最終決戦、敵の魔王を倒すために千年の邪気を封じ込めた、狼鬼の仮面をかぶり狼鬼となり魔王を倒した。

シルヴァは自分が人でいられるうちに自分の仲間の手により封印された。

だがシルヴァは狼鬼として悪魔の手により次の代のプリキュアを破壊した。

狼鬼は悪魔の手に余り千年の前のプリキュアの手により千年の邪気を浄化され力が弱まっていた、それによりシルヴァを悪魔として狼鬼の力を封印した。だが狼鬼は残りの邪気で狼鬼の面を複製し小町を依り代に甦り邪気を集めるため悪魔の軍勢に与したことにより、本体の封印をとこうと小町を介して封印したプリキュアとしての記憶を復活させる。そして記憶を取り戻したシルヴァのプリキュアをこの手に掛けた悲しみが狼鬼にさらなる力と

自らの受肉を果たさせた。

と説明のあとシルヴァと小町を天空島のアイラの家に運ぶのだった

第6話シルヴァ変身！、キュアグラディウス

シルヴァはうなされていた。今のプリキュア達の先代のプリキュアを狼鬼として悪魔に復活させられもとはプリキュアである自らの手で葬ったことを夢の中、プリキュア達から責められる夢をみていた。

シルヴァ「っは！」

シルヴァ「ここは、」

アイラ「目が覚めましたか。」

シルヴァ「ラミアっ？」

アイラ「ラミアは私の祖母の名前です。私は祖母のラミアより巫女の座を譲り受けたラミアの孫アイラと申します。」

シルヴァ「そういえば、ラミアは孫ができたと千年前の魔王との戦いの時にいっていたな。名付け親になってほしいと言われたが、結局候補を紙にまとめただけで、そのあと私は・・・・」

アイラ「ラミアおばあちゃんから、私の名前は戦士が考えた名前から一番最初にかいてあった名前をつけたと、聞いています。だから本当の意味でシルヴァさんは、私の名

付け親になっているんですよ。」
シルヴァ「そうか。」とシルヴァは微笑み立ち上がり部屋をでようとする。
アイラ「どこに行くんですか。」
シルヴァ「私は狼鬼としてプリキュアを手にかけてしまった。」
アイラ「それは狼鬼に操られて。」
シルヴァ「どんな理由があったって、私の手でプリキュアを殺してしまったのは事実なの。私にはもうプリキュアになることも、いえ、なる資格もないのよ。」
シルヴァはアイラの静止の声も聞かずに家を出た。
アイラの家に、八重と陽乃がシルヴァと小町の様子を見にやって来ていた。小町は相変わらず意識が戻らず寝たままだった。シルヴァは、目が覚めると同時に家を出たそうだ。
アイラ「これは!」アイラが何かを感じとる。
そして
ランド「大変だ。狼鬼がこの島に」
ミラ「パワーアニマル達も押されてる。」
私と陽乃は変身して狼鬼のいる場所に向かった。
ガオディアス、ガオジュラフ、ガオライノスとガオマジロの四人の女性の姿をした。

パワーアニマル達が戦っている、四人の後ろには、狼鬼との戦いのために怪我をおった、パワーアニマル達がいました。
ガオマジロ「ライノスこれじゃみんなやられちゃうよ。」
ガオライノス「マジロ今、ランドやミラがプリキュアを呼びに言ってる。それまで持たすんだ。」
ガオジュラフ「私達とファルコンがいれば、イカロスが使える。」
ガオマジロ「あたし、シルヴァとまた戦いたかったな。」
ガオディアス「マジロ」
ガオライノス「あの娘はやさしい娘だ、自分の後輩を手に掛けたことを気にかけて、プリキュアに変身する資格はないと思っているのかもしれない。」
ランド「みんなぁぁ！」
とプリキュアがライノス達のもとについた時間を少し遡り
此処を去る前に天空島をみてまわろうとシルヴァは天空島を見て回り最後にこの火山に来ていた。
アレン「此処を去るつもりか？」

シルヴァ「アレンっ」

アレン「貴女は、時分を攻めすぎよ。」
シルヴァ「私に、もうプリキュアをやる資格はないのよ。」
アレン「そんな事ないわ。」と行った時にアレンとシルヴァは、天空島に侵入したある気配を感じた
アレン「これは?」
シルヴァ「狼鬼」
シルヴァは走り出す。
アレン「シルヴァ‼」
シルヴァ「あれは私が決着を着けなくてはいけないものだ。」といって駆け出す。
シルヴァ（私は、今まで殺めてしまった。プリキュアの敵は私が取る。）
シルヴァはその場所について驚愕した。
プリキュア達が倒されていた二人ともボロボロだ。
シルヴァ「だいじょぶか。二人とも」
パラディン「シーちゃん」
シルヴァ「そこまで元気ならだいじょぶ。」

とシルヴァは剣を取り出すそれは獣皇剣だった。
シルヴァ「狼鬼ッ！貴様の蛮行もここまでだ。貴様は私が倒す。」

シルヴァは獣皇剣で狼鬼に切りかかる
狼鬼「シルヴァか、ふっ！」と
シルヴァ「やぁっー！」
狼鬼とシルヴァが切り結ぶ
狼鬼とシルヴァの実力は拮抗している
狼鬼「やるなぁ！」
シルヴァ「伊達に千年もあんたと融合してたんじゃないあんたの攻撃パターンくらいわかるわよ！」
狼鬼「だが、千年の邪気を取り戻した。私を嘗めるな。貴様も知ってるだろう、魔王を倒すために私の力を使っているのだから、それに貴様が私のパターンを読んでくるぐらいはお見通しなんだよ。」と狼鬼のパターンを読んで攻撃を仕掛けて来たところをフェイントでかわし攻撃する。
シルヴァは後悔していた。皆を仲間を助けるためと狼鬼の仮面に頼ってしまった。

あのとき確かにもうひとつ魔王を倒す方法はあっただが、皆には生きていて、ほしかった。

シルヴァ「私は・・・・、天空島よ、今一度、いやこれっきりでも構わない、私に戦う勇気をくれ‼」と叫び狼鬼と戦うが狼鬼に完全に動きを読まれ、攻撃をくらう。

シルヴァ「ダメなのか、やはり私では！」

すると空から５つの光が降ってきた。

シルヴァ「これは、ガオの宝珠！」

アレン「私達の力を使え、昔のように」

ガオジュラフ「また戦いましょう。」

ガオディアス「そうですよ。」

ガオマジロ「シルヴァー！」

ガオライノス「さあいくぞ。」

と五人のパワーアニマルは手を繋ぎ、シルヴァの手にある自分達の宝珠にエネルギーを送るすると宝珠は、１つになり、その１つになった光はシルヴァの手に装着された。

アレン「それはＣブレスフォン、昔の仲間の心と力がお前に力を貸してくれるはずだ。」

シルヴァはブレスフォンを手からとり、Ｃフォンを開く

シルヴァ「キュアアクセス、はぁッ！サモン・スピリットオブ・ジ・アース‼」ガオファルコン達の5体のパワーアニマルの心が、凍りついた。百獣の聖なる騎士を目覚めさせるのです。千年前のプリキュアはパワーアニマルの力を使い変身する、嘗てのパワーアニマルの相棒達の意志がパワーアニマルの宝珠を通して伝わってくる。

それをひしひしと感じながらプリキュアドレスを纏う

「百獣を司りし聖なる騎士‼キュアグラディウス！」

グラディウス「ファルコサモナー‼」とグラディウスは専用武器のファルコサモナーを呼び出し

グラディウス「くらえ、プリキュアファルコンブレイク‼‼‼‼」と狼鬼に大ダメージを与えた。

狼鬼「ここまで追い詰められるとはな。だが私にも奥の手はある！」狼鬼がとり出したのは闇の力に染まったガオの宝珠だった。

グラディウス「それはッ！」

狼鬼「先代のプリキュアから私達で奪った宝珠だ。パワーアニマル達も闇の力に染まり魔獣と化して私に従う。こい、ガオリゲーター！、ガオコヨーテ、ガオハンマーヘッド、魔獣合体‼」

狼鬼「ガオハンターイビル」

アレン「私達を使え、グラディウス」

グラディウス「よし、ファルコサモナー、サモンモード
こい、ガオファルコン、ガオジュラフ、ガオディアス
、ガオライノス、ガオマジロ」と五人のパワーアニマルがパワーアニマルの真の姿にかわる
５体のパワーアニマルが１つとなるとき
天空の精霊王が生まれるのです。
グラディウス「天空合体！」
グラディウス「ソウル・ドライブ‼」
グラディウス「誕生、天空の精霊王、ガオイカロス！」
そしてイカロスの必殺技、イカロスダイナマイトにより
狼鬼は消滅し、黒く染まった宝珠がもとに戻った。
そしてグラディウスはイカロスから降りて、パラディンとデュークのもとに駆け寄る。
パラディン「グラディウス！」
グラディウス「これからよろしく頼むぞ。リーダー」

パラディン「私がリーダー?」
デューク「いいんじゃない、パラディンがリーダーで、
私は賛成!」
そして私達三人はホーリーナイト・プリキュアとして、
1つになった。シルヴァは、私達の家で暮らすことになり、中学に転校してくるらしい。

オリキュアオールスターズ
オリキュアオールスターズその1戦士たちとの出会い

ここは都心部ににある、最近オープンしたショッピングセンターだ。
八重と陽乃、シルヴァは八重と陽乃の家に住むことになり、近々中学に転校してくるというので今日は、身の回りの日用品の買い物に来ていた。シルヴァには驚かされてばかりだった。エスカレーターをみれば、階段が動いてる！と驚きテレビをみれば中に人がいるなどエトセトラ、エトセトラ
八重「さて、一通りのものは飼ったし、ご飯にしよっか。」
とシルヴァの方を見ながら歩いていると人にぶつかってしまった。
？「すみません」
八重「こちらこそすみません。」と謝っていると彼女の連れらしき女の子がこちらに声をかけて来た。
？「なにやってんだよ。ヒカル」
ヒカル「ごめん、カスミちゃん皆とお出かけするのひさしぶりだからテンション上がっちゃって、エヘヘ。」

カスミ「全くすまねぇな、こっちのツレが迷惑かけちまったみたいで。」
サラ「カスミさん、ヒカルさん、どうかなさったんですか。」
ツバサ「ヒカルさん、またなにかドジをしたんですか。」
メグミ「ヒカル、また何かしたの。」
八重「此方がぶつかってしまっただけなのでヒカルさんは悪くないんです!!」
カスミ「そうか、みたところ同い年みたいだし敬語はいいぜ。」
八重「そうか、ならこれで喋らせてもらうわ。」
陽乃「八重、皆でご飯食べにいかない。」
八重「いいかもね。それ、メグミ達もご飯食べにいかない。」
カスミ「いいんじゃない、俺達もいこうぜ。」
サラ「そうですね、お邪魔させてもらいます。」
メグミ「まぁそういうなら、私達もね」
ツバサ「そうね。それじゃいきましょうか。」
とその時、世界は紫色に染まる。
八重「こんな時にッ!」
陽乃「間の悪いやつら」
二人は走り出す。

カスミ「おい、どこいくんだ！あぶねぇぞ。」
ヒカル「追いかけよう、もしもの時は、皆！」
四人「うん！」
五人は、二人のあとを追う
そしてこの紫色に染まった世界は外側をドーム状に囲まれている。
それをみて、そこに向かう五人の人影があった。
？「あれいったいなんなんだろ。」
？「明日香急ぐよ。」
明日香「うん！心美ちゃん」
五人は、結界のある場所に向かった
一方結界の内部では、
八重「まったく空気の読めないやつらだな。」
陽乃「さっさと片付けて。」
シルヴァ「ランチタイムと洒落混みましょ。」
八重と陽乃はペンダントを、シルヴァはCブレスフォンを取り出す。
八重・陽乃「チェンジプリキュア・セイントアーップ！」

シルヴァ「キュアアクセス、ッは！サモンスピリットオブジアース‼」
パラディン「光を司りし聖なる騎士キュアパラディン！」

デューク「風を司りし聖なる騎士キュアデューク‼」
グラディウス「百獣を司りし聖なる騎士キュアグラディウス！」
三人「騎士の聖なる魂が闇の中から光を拾う。」
三人「ホーリーナイト・プリキュア！」
それを後ろからみていたヒカル達5人はメチャメチャびっくりしていた。
カスミ「プリキュアになった。」
ツバサ「プリキュアって私達だけじゃなかったのね。」
ヒカル「どうなってるの！」
ヒカル達がそんな話をしていると
パラディン達の前にあるひとりの男が現れた。
フェレス「やぁ、プリキュアの諸君、私はメフィスト
・フェレス伯爵だ。」
フェレス「私の知るプリキュアに倒されし悪の力よ。甦り、プリキュアに対する恨みをはらせ。」

と魔方陣を展開し自分の血をたらすと影がいくつもの形をつくりその影から、プリキュアが今まで倒した暗闇獣、パラディン達が名前をしらない。レッドビー
カーラなど、その中には
グラディウス「狼鬼！」

デューク「グラディウスが倒したはずじゃ。」
そして、敵が一斉にプリキュアに襲いかかる。
パラディンやデューク、グラディウスは数の差に負けて
攻撃をくらってしまう。
そしてさらなる攻撃を受けようとした時に、昼間にあった5人が間に入る。
ヒカル「大丈夫？」
メグミ「あれはカーラ！」
ツバサ「とりあえず、三人を助けましょう。」
ヒカル「皆、行くよー！」
「「「おっけー！」」」
「「「「プリキュア・リリースフォース‼」」」」
セイバー「輝け！、奇跡の光！、キュアセイバー‼」

ブレイブ「轟け！勇気の咆哮！キュアブレイブ‼」
シンフォニア「包め！安らぎの旋律！キュアシンフォニア‼」
シルフィード「舞え！自由の風！キュアシルフィード！」
ジャスティス「響け！正義の鼓動！キュアジャスティス！」
セイバー「未来を照らせ。」
「「「希望の光」」」
５人は手を天に翻して呼吸を合わせる。

「「「「光り光輝け５つ星」」」」
まっすぐに前をみすえ、自分達の存在を示す。
闇を照らす光として

「「「「レイフォースプリキュア‼‼」」」」

オリキュアオールスターズ②天使の参戦

パラディン「プリキュアっ？」
デューク「えぇぇぇぇぇー!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
グラディウス「まさか、私達他に現代にプリキュアがいたとは。」
セイバー「私達もびっくりしてるだけどもね。」
ブレイブ「今はそんな事言ってる場合じゃねぇな。」
シルフィード「ナイスガッツ！だったよ。やっぱヒーローはこうでなくちゃ。」
シンフォニア「またシルフィードの悪い癖が」
ジャスティス「お三方立てますか。？」
パラディン「プリキュアの先輩ってことか」
デューク「先輩ねぇ。」
グラディウス「とりあえず今は戦うぞ。」
狼鬼はジャスティスとグラディウス
カーラはデュークとシルフィード、
レッドビーはシンフォニアとブレイブ

メフィストはパラディンとセイバーが戦う
８人はそれぞれの敵と戦うが、それぞれがプリキュアと戦ったときより強くなっている。
フェレス「中々やりますね。プリキュアの皆さん！私の目的はみなさんの実力を知ることの他にもうひとつあります。」とメフィストは懐からあるものを取り出す。
グラディウス「それは、天空島の秘宝、深紅の宝珠か！」
フェレス「やはりコレがそうなのですね。」
グラディウス「それを何に使うつもりだ。」
フェレス「この宝珠のもたらす莫大な力を使い、魔王を
復活させるのです。」
ランド「悪いがそれは返してもらうぞ。」とボロボロのランドがあらわれた

パラディン「ランドいったいどうしたのよ。」
ランド「やつが数時間前に天空島を襲ってきて、深紅の宝珠を奪っていった、なんとか、奪い返そうとしたんだが、先日の狼鬼との戦いの傷が治りきっていなくてな。
そこをつかれて私達はほとんどが攻撃をもろにくらって
な、我々パワーアニマルもほとんどが傷が治りかけていたのがまた逆戻りだ。」

そんなパワーアニマルたちがやられるなんて

ランド「アイラが助っ人を探してて今しがた見つけて、今ミラが迎えにいっているの。」

フェレス「ふむ、助っ人とやらがこられても厄介です。今のうちに潰して起きましょう。」魔法を射つが

ミラがこれを防いだ。

そして、パラディン「プリキュア！ブレイジングファイヤー！」とランドからもらったライオンファングを使い

技を放つそしてそれと同時に宝珠を取り返した。

フェレス「貴女はわたしを完全に起こらせてしまったようですね。本来ならわたしは女性には手をあげないんですが」

？「そこまでよ。」

フェレス「何者ですか。」

？「いくよ。皆！」

五人「プリキュアパワー‼‼、サモンアップ！」

『サモンゴールドパワー』
『サモンフレイムパワー』
『サモンウッドパワー』
『サモンラウンドパワー』
『サモンウォーターパワー』
ゴールド「金に輝く明日への希望！キュアゴールド」
フレイム「真っ赤に燃える心の炎！キュアフレイム」
ウッド「深緑の映える聖なる木々！キュアウッド」
ラウンド「黄色に染まった恵みの大地！キュアラウンド」
ウォーター「命育む青き結晶！キュアウォーター」
「「「「絆の生んだ奇跡の力‼エンジェルプリキュア！‼」

オリキュアオールスターズ③プリキュア敗北、勝利のヒントは合体!!

デューク「エンジェルプリキュア！」
メフィスト「バカな三組目のプリキュアだと、おのれ何処までも私の計画を狂わせる！!!プリキュア！」と
メフィストが怒りに震え体を巨大なドラゴンの姿に変えていく
そしてプリキュア襲いかかる
プリキュアたちはなすすべもなくその巨体に似合わぬスピードに翻弄され一人、また一人攻撃を受け倒れていく。
そして深紅の宝珠を奪われてしまった
そして、メフィストがプリキュア止めをさそうとした時、傷だらけのガオライオンに似たパワーアニマルが
メフィストの攻撃をとめていた。
グラディウス「ガオレオン！」
パラディン「ガオレオン？」

グラディウス「天空島を守護するガーディアンズ、その力を精霊から神霊へと昇華させたパワーアニマルの神と言われるものの一体だ。」
デューク「なんで、そんなたいそれた存在が！」
グラディウス「恐らく・・」
アイラ「皆さん！」
パラディン・デューク「アイラ！」
アイラが結晶を取り出すそしてプリキュア達を天空島に転移させた。
そして天空島、アイラの家にてプリキュアが勢揃いしていた。
明日香「それで、あの宝珠ってなにかな。」
ヒカル「そっ、あとこの場所とかあのライオンとか、
」
アイラ「その事についても今から説明をします。」
アイラは、天空島の秘密、パワーアニマル、そして深紅の宝珠、それは天空島の火山に眠る業火の化身といわれるパワーアニマルのかかえる炎のエネルギーは、宇宙を誕生させたビッグバンに匹敵する力をもつ、メフィストその誕生の力を使い、魔王を転生させるつもりらしい
八重「メフィストに今の私達で勝てるのかな。」

ランド「手はある。」
ランドとミラが入っきてそう言った
陽乃「ランド、ミラ」
アイラ「ランドそれは、」
ミラ「三神合体」
ランド「プリキュアの最終奥義には精霊王とプリキュアが合体一人の騎士として誕生する精霊合体、スピリットフュージョン」
ミラ「それの最終奥義にあたるのが、３人のプリキュアが１つになり、神を司りし聖なる騎士になる三神合体」
ランド「島の守り神ガオゴットの力を宿した存在に一時的になることができる。」
ミラ「でも、それになるには合体するプリキュア３人はある条件を満たしていなければいけない、哀しみ、痛み、戦士の闘う意志」
ランド「この三つが揃わなければ、それになることは出来ない。」
私達は早速特訓を開始したのだがいくらやっても3人の力が1つになることは出来なかった。
八重「やれるの？私達に」
陽乃「八重らしくないね。珍しく弱気になっちゃって。」

シルヴァ「無理をするな陽乃、内心不安なのはみな一緒だ。」
そして特訓は続けられ、プリキュアの怪我も治りつつあり保々闘かえる
そして狼鬼の時と同じく再び天空島に悪魔の結界が展開された。
アイラ「これは、」
ミラ「メフィストってやつね。」

そして、島に集まったプリキュアは変身それぞれ変身してメフィストのもとに向かう
八重達も同様にパラディン・デューク・グラディウスに変身してそこに向かう

メフィスト「やぁ、皆さんお揃いで、深紅の宝珠の目覚めには天空島を使わなければ行けなかったのでね、前回は、下調べでしてね。今回は天空島のパワーアニマル、プリキュアすべて排除させて頂きます。」

ゴールド「そんな事は‼」
セイバー「絶対にさせない！」
パラディン「いくよ。皆！」
１３人「オッケー！」

ここにハーメルンの作者達の描いた伝説の戦士プリキュア達が揃った。
彼女達こそ、オリキュアオールスターズ、キュアブラック達原典プリキュアが生まれる前の過去に生まれた旧き世代のプリキュア達である。
ブレイブとフレイム、ウッドとシルフィード、

ジャスティスとウォーター、シンフォニアとラウンド
セイバーとゴールドがペアになって戦う
セイバー「雑魚は私達に任せて!!」
ゴールド「貴女達は宝珠をメフィストから取り返して」
メフィストの呼び出した百を超える数の暗闇獣をパワーアニマルとともに倒してゆくセイバー達、
パラディン「いくよ。」とパラディン達も同様に立ちふさがる暗闇獣を倒しながら進んでいく。
メフィスト「おや、またノコノコとやられに来ましたか
お嬢さんがた」とメフィストは怪人態へと姿をかえる。
そして
メフィスト「ふんっ!」メフィストのあまりのスピードについていけない3人のプリ

キュア達は攻撃を受ける
パラディン「デューク、グラディウス！、キャッ!!」
そのあともプリキュア達は、攻撃を仕掛けるがあたらずダメージを与えることが出来なかった。

デューク「強いね！」
グラディウス「勝てるのか、私達！」
パラディン「皆！こうゆう時こそ闘う意志をなくしちゃだめだよ、戦士の背負う、深い悲しみ、痛みそれが戦士の闘かわなければいけない意志につながるんだ、意志のないものが戦ったって勝てないんだよ。だからッ！」
デューク「そうだね私達も逃げる訳にはいかないかな。」
グラディウス「やっと私達らしくなってきたじゃないか。」
するとプリキュア3人が黄金の光に包まれた。
パラディン「これは！」
デューク「もしかして」
グラディウス「今ならいけるかもしれないぞ。」
パラディン「試してみますか。」

３人「聖なる騎士達の背負いし、悲しみ、意志が、戦士達を奮い起たせ、闘う意志を産み出し、聖なる騎士３人を今１つにし、今！神の化身とならん!!」

３人「三神合体!!!!」

そしてパラディン達プリキュアが融合し新たな神を司りし騎士が誕生するのです！

「神の化身にして！、天空島を司りし聖なる騎士!!!!

キュアゴット!!!!」

オリキュアオールスターズ④終決、神の力

メフィスト「キュアゴット!、まさかこの時代にこの領域まで達することの出来るプリキュアがいようとは。」
キュアゴット「ふっ、今の私からしてみれば、初めましてになるのか、フェレス」
メフィスト「ふっ、そうなるかな、ゴット」
ゴット「では決めさせてもらうぞ。」
ゴット「プリキュア‼ペインシャウター‼‼」
メフィスト「うぁっ!」
メフィスト「昔と変わらないなだが昔と一緒では今の私には勝てん。」
ゴット「私が成長していないとでも思ったか。」
ゴット「フォームチェンジ‼‼」
ゴットの精神世界の中でプリキュアの3人は並びをパラディンを中心としたゴットの時とは別にデュークを中心とした並びに変わった
そしてガオハンターを擬人化させたような蒼きプリキュアがそこには立っていた。
「天空島に満ちる蒼き月!、キュアハンターブルームーン!」以後ハンターＢＭ

ハンターＢＭ「喰らえ！魔獣十六夜斬り!!」
メフィスト「ぐはぁっ！」
ハンターＢＭ「フォームチェンジ!!!!」
そして精神世界のプリキュア達の並びがグラディウス中心のものになり、
ガオイカロスを彷彿とさせる深紅のプリキュアに変化し
「焚ける烈火の鳥神!!キュアイカロス！」
イカロス「究極天技！イカロスダイナマイト!!!!」
イカロス「ゴットで締めだ！フォームチェンジ!!!!」
神のような雰囲気を纏った金と黒のプリキュア、キュアゴットに姿がもどり。
ゴット「止めだ天誅ゴットアロー!!」
メフィスト「うぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」と爆発した、たがしかし爆発した地点に何処からか黒い霧が集まってきた。
同時告オリキュアオールスターズ達が暗闇獣と戦っていると暗闇獣がいきなり黒い霧となってパラディン達のいる方向に向かっていく
ブレイブ「あれはいったい？」
シルフィード「とりあえずパラディン達のもとに向かいましょ。」

オールスターズはパラディン達のもとにむかった
パラディン達は、黒い霧の集まった場所から出てきたメフィストを思わせる怪獣と対峙していた。
ゴットからの変身が解けてパラディン、デューク、グラディウスに戻っていた。
パラディン「なんで、あんなに攻撃してよみがえんのよ。」
デューク「しかも、ガオキングとイカロスで勝てるかな。」
アイラから連絡が入る
アイラ「今、ランドが負傷してガオキングにはなれないの」と言われ

グラディウス「どうするガオキングなしでは、最大でハンターも入れた3体での戦闘が出来ない。」
すると
セイバー達が合流した。
セイバー「私達も協力するよ。」とデュークはガオハンターブルームーンを呼び出し、
ブレイブ、フレイム、シルフィード、ラウンドを乗せる
グラディウスはジャスティスとウォーター、ウッド、
シンフォニアを乗せてガオイカロスに乗る、

だがパラディンは相棒のランドがおらずガオキングが
呼べない状況にあったするとアイラから持たされていた深紅の宝珠が輝き、火山から、ガオコングが爆誕した。
そして、シャーク、イーグル、タイガー、バイソン、エレファント、そして島のガーディアンズ、ガオレオン、
ガオコンドル、ガオソーシャーク、ガオバッファロー、
ガオジャガーが集まり、ガオナイト、ガオゴットとなる
セイバーとゴールドは、ガオナイトに
パラディンはガオゴッドに乗り込むメフィスト怪獣態に戦いを挑み苦戦しながらも、メフィストを打ち倒し、プリキュア達の世界と、天空島に平和が戻った。
そしてプリキュア達はささやかながらパーティーを開き親睦を深め、最後に写真をとり、再びそれぞれの生活に戻った。
そしてホーリーナイトプリキュアの戦いの日々はまだまだ続いていく。

第７話タイムスリップあってわならない奇跡！、ホーリーナイトプリキュア対砂漠の使徒プリキュア新世代誕生の秘密

パラディン「せいっ！、なんだろう今日の敵はいつもより強い！」
デューク「この間のメフィストとおんなじくらいかな。」
グラディウス「やつはクロノス、時の魔神と言われるやつだ。」
クロノス「ふっ、メフィストを倒したと言うから今回のプリキュアは期待していたのだが、期待できそうなのは裏切り者のシルヴァくらいか。」
パラディン「このままじゃ拉致があかない、皆あれ！やるよ！」
３人「聖なる騎士達の背負いし悲しみ、痛みが騎士を奮い起たせ戦う意志を産み出し、聖なる騎士３人を今１つにし、神の化身とならん!!」
３人「三神合体！」

ゴット「神の化身にして、天空島を司りし聖なる騎士！

キュアゴット!!!!」
クロノス「出たなゴット、ひさしぶりだな!」
ゴット「そうね。」
クロノス「お前だからこそ、分かるだろう私が何をしようとしているのか、今の世界がなぜ本来なら貴様等だけのはずのプリキュアが別に複数いるか。そして何回私と戦い、他のプリキュアが生まれる原因になったか、何の罪もない少女が無闇に戦うことになる原因を創ったのか。」
ゴット「・・・・・」

クロノス「黙りか、だが、タイムスリップしたところで
結局は新たなプリキュアの生まれる世界を作りだしたお前達の罪再び償え。」
ゴットはクロノスの放った技に包まれた。
そして世界は再び繰り返す。
ゴットのタイムスリップはかつて妖精達の住んでいた世界が１つで合った頃より、別れていた国や里、園に奇跡をもたらし、それぞれの場所に集う悪を追い払い破壊され尽くした世界を再生させた。
そして、その世界の妖精達は彼女を可愛い少女の姿をした癒しの神、キュアゴットと

として語り継がれていく。
　このキュアゴットについての話は、やがて妖精の世界が別れ続け次第に忘れ去られ、各世界に残っていたキュアゴットの奇跡の光に選ばれた闇を払う人間を伝説の戦士プリキュアと呼んだ語り継がれていったのだ。
　そしてゴットがクロノスにより、過去に飛ばされ流され続け５０年前、
キュアフラワーこと花崎薫子は、自分の世代最後の戦いをしていた。
　砂漠の使徒との戦いは、代々心の大樹に選ばれたプリキュアが戦っているそして、敵の一撃をうけまさに危機一発の所で奇跡は起きた。
　癒しに満ちた暖かな光をもたらした神の姿をみたのだ。
　彼女の姿はかつて自分をプリキュアにしてくれた妖精コッペさまより聞いた。プリキュアの起源になったプリキュアの神キュアゴットの姿を光の中に感じたそしてゴットのもたらす光はフラワーに最後の力をくれた。
　そしてフラワーは無事にこの戦いより帰還し、後にプリキュアとなった。孫にこの事を語って聞かせるのでした。
　そしてゴットとなった３人は現代に戻り、変身が解けていた。
　八重「ここは?」
　陽乃「どうやら戻ってこれたみたい。」

シルヴァ「そのようだ。だがクロノスから攻撃を受けたあとの記憶があるやついるか。」

そして３人とも覚えてはいなかった。

そして３人が翌日学校にいくため制服に着替えようとすると制服がかわっていることに気がついた。

そして３人はとりあえず制服を着て学校に向かうだが３人は気付かない、かつて住んでいた場所、通っていた通学路がそれぞれ違うのに自分達が通った道だと感じ、学校に当校したのだが、学校についてようやく自分達が違う学校に通っていることに気付く３人、

学校の名前はベローネ学園女子中等部３年薔薇組

に所属しているそれが生徒手帳からわかったことだった

八重「これってもしかして」

シルヴァ『何らかの理由で世界が改変されて閉まったのだろう。クロノスのいっていた。本来なら私達しか生まれないはずのプリキュアが誕生した理由とかにも所以するものだろう。』

陽乃『とりあえず、校舎に入ろっか。』

とりあえず中に入って校舎の教室を確かめようとした時、

「あっ！八重先輩！」と八重は聞き覚えのある声に驚いていた。
そして八重は声のする方向に顔をやると、私が改変前からの学校の後輩、美墨なぎさと雪城ほのかがいた。
八重「なぎさとほのかじゃない、おはよう。」
私は驚いたのだプリキュアになって悪魔と1年間戦い、
新入生にこの二人が入ってきたときはとてもびっくりしたのだ。
二人「おはようございます。」
なぎさ「それにしても先輩いつになったらラクロス部戻ってきてくれるんですか。先生もいい加減やばいですよ。」
ほのか「なぎさ、先輩だって予定があるんだから。そんなに無理いったら駄目よ。」

第８話力をなくした先輩と変身した後輩

世界改変の影響により陽乃やシルヴァと別の中学になってしまった。八重はベローネ学園女子中等部３年になっていて、暫く休みがちだったラクロス部に復帰して練習を終えて、後輩二人と一緒に帰り道についていた。

八重「やっぱりひさしぶりだと、体に堪えるな。」
なぎさ「何いってんですか。部活に全然出てないのに休む前よりうまいってどういうことですか。ぶっちゃけアリエナイ!!!!」
ほのか「まあ、結果的に良かったんじゃない。」とその時、世界は紫色に包まれた。
八重「なっ！」
なぎさ「ほのか、これって」
するとなぎさとほのかのお揃いの携帯ポーチから可愛らしい妖精が出てきた。
メップル「なぎさ、とても恐ろしい気配を感じるメポ」
ミップル「今までのドツクゾーンとそれとは別に違う気配を感じるミポ」
ほのか「なぎさ急ぎましょ。」

なぎさ「先輩はここで隠れててください。」
と二人は妖精を抱えながら走っていった。
八重「なんだったんだろ、ってそんなことより変身をってそうだ、そういえば一人でも変身できるようにってペンダント預けたままじゃんどうしよう。」
ランド「そういうだろうと思って持ってきたぞ。八重！」
八重「ランド！、良いところに、それでペンダントは）とランドは携帯らしきものを投げてくる
八重「これは！」
ランド「それはCフォン、お前達のペンダントを組み込んだ、シルヴァのCブレスフォンの改良型だ。変身するときはシルヴァと同じようにしてするんだ。」
八重「ありがとうランド、いこうか。」
ランド「あぁ」と私達は後輩たちのもとに駆け出した。

そしてほのかとなぎさ達は何時もとはちがう敵自らを悪魔と名乗るアモンが呼び出したザケンナーを倒したあとに呼び出された暗闇獣に苦戦していた。
ブラック「なんなのこいつ！」
ホワイト「ザケンナーよりもっと強いなんて」

とそして二人の中によぎったのは先程の場所に置いてきた。八重のことだ。八重は中学に入ってまだなにもわかっていなかった頃に色々と親切にしてもらい、ブラック、なぎさに至ってはラクロスを始めるきっかけになった人であり憧れの先輩である。もし、偶然とはいえ自分が巻き込んだ先輩になにかあったらと思うと余計に焦りがまし攻撃が段々と単調になってきていた。

ブラックは暗闇獣の一撃を喰らってしまった。

ホワイト「ブラック！」

そしてブラックが再び攻撃を受けようとした瞬間、ホワイトは庇おうとするが間に合わないブラックは目を摘むっただが、何時まで立っても攻撃の痛みがやってこない

そしてブラックが目を開けるとそこには赤く巨大なライオンと先程から心配してきた先輩がいた。

八重「大丈夫！、なぎさ、ほのか」

ブラック「先輩？」

ホワイト「ブラックそんな事言ってる場合じゃないわ。

」

ブラック「えぇ、てゆうか、なんで私達がなぎさとほのかってわかるの」

八重「まあ、それは先輩だからとしか言いようがないかな。それと、なんでこんなと

ころにいるのかとかは今からわかると思うな。」
するとハ重は金色の携帯のようなものを取り出すすると
赤いライオンはその携帯の中に消えた。
八重「キュアアクセス！っは！サモンセイント・オブ・ジ・アース」すると暖かな光が八重を包み岸甲冑をイメージした。バトルドレスに服装が変わり髪の毛が金色になってサイドテールに結んだ格好になったそして八重は高らかに名乗った。
パラディン「光を司りし聖なる騎士！、キュアパラディン‼︎」
パラディン「闇の中から光を拾う！ホーリーナイトプリキュア‼︎‼︎」
そしてブラックは、彼女の口癖をこれでもかと言うぐらいに大きな声で叫んだ。
ブラック「ありえなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい‼︎‼︎‼︎‼︎‼︎‼︎」

第９話陽乃の後輩Ｓ☆Ｓ

ブラックの叫びがこだまする。
パラディン「どうしたのよ。ブラックそんなに驚いちゃって。」
ブラック「驚かないほうがおかしいですよ。先輩、いつからプリキュアだったんですか。」
パラディン「１年くらい前かな。」
ホワイト「私達より前にプリキュアになっている人がいたなんて。」
パラディン「最初は驚くよね。私も他の先輩に合った時はビックリしたし。」
パラディン「さぁ、あなた達も疲れてるだろうし、ここは私が決めるわ。」

パラディンは力を両手に集中させてライオンファングが装着された。

パラディン「プリキュア!!!!ブレイジングファイヤー!」
パラディンは暗闇獣を倒した。
パラディン「それじゃ、私のことも、教えてあげたいから、ついてきて。」

とパラディンは変身を解除して二人も変身をといた
そして八重に連れられて八重の家に案内されるのだった。
そして時は、少し前に遡る。
陽乃は世界が改変されたことにより大好きな八重と一日中一緒にいることが出来ないことになってしまい陽乃はご機嫌斜めだった。
そして陽乃は夕凪中学に転校とゆう形で入学するとことになった。
そして陽乃は同時期に転校してきた美翔舞という生徒と
知り合った。
彼女と話していくうちに段々と親しくなり、彼女の親友の日向咲とも知り合った。
陽乃は今日は調度部活も休みだという咲と転校してきたばかりで部活に入っていない咲は是非とも家のパンを食べていってほしいと咲の実家のＰＡＮＰＡＫＡＰＡＮに向かっていた。
陽乃「へぇ～、そんなに美味しいんだ。咲ちゃんの家のチョココロネ」
咲「はい、舞も先輩も、家のチョココロネを食べたら絶対リピーター間違いなしです。」
陽乃「そこまで言うなら、八重たちにもお土産で買っていこうかな。」
舞「八重さん?」
陽乃「あぁ、いってなかったね。私達親がいなくて、八重とシルヴァってこと3人暮

らしなの。」
舞「すみません。」
陽乃「気にしないで、私達もそれなりに楽しくやってるし、そうだ二人とも今日私の家に泊まりに来ない。」
舞「そんな、いきなりいいんですか。」
陽乃「気にしないでいいよ。私も八重達もきっと大歓迎だよ。」と咲と舞も承諾し、とりあえずＰＡＮＰＡＫＡＰＡＮにいきチョココロネを買い、舞も家にいって準備してくるといったん別れ大空の樹のある場所に集合ということになった。
そして舞がやって来た。
舞「お待たせしました。」
すると世界は紫色に包まれた。
陽乃「嘘、こんな時に！」
すると何時もの悪魔とは違うやつが出てきた。
陽乃「あなたは？」
「私の名はカレハーン、アクダイカーン様に仕えるダークフォールの戦士だ。」
陽乃「それで、そのダークフォールが何の用よ。」
カレハーン「ふっ、知れたことプリキュアを倒し、太陽の泉の在りかを知ることだ。」

そしてカレハーンがウザイナーを呼び出し、陽乃を攻撃した。今の陽乃は変身していないためもろに攻撃を喰らってしまった。

咲「先輩！、舞！」

舞「うん！」

咲、舞「デュアルスピリチュアルパワー!!!!」

ブルーム「輝く金の花！キュアブルーム！」

イーグレット「煌めく銀の翼キュアイーグレット」

二人「二人はプリキュア！」

イーグレット「聖なる泉を汚すものよ！」

ブルーム「あこぎな真似はお辞めなさい！」

陽乃（うっそ、あの子達プリキュアになっちゃった。！）と心の中でおどろきつつ自分も変身しようとするが今は変身用のペンダントも、ミラに預けているしそもそも八重がいないから変身できないことに気付いた。

そしてカレハーンがウザイナー相手に苦戦する、ブルーム達にさらに追い討ちをかけるように

カレハーン「一気に決めさせてもらう、いでよ暗闇獣！」

陽乃「うそ、暗闇獣!!!!、なんで悪魔でもないのに暗闇獣を呼びだせるのよ。」そして

陽乃は自分も変身出来ればと、思ったその時狼の咆哮がきこえたその場にいた全員がその方向をみる

陽乃「ミラ！」

パワーアニマル状態のミラから光が陽乃に向かって放たれ陽乃はその光をキャッチするその光はＣフォンへと変化する

そしてミラから念話で使い方を教わり、ミラがＣフォンのを中に光となって消える。

陽乃「二人とも、私も加勢するよ。」

陽乃「キュアアクセス！っは！、サモン・セイント・オブ・ジ・アース！」そして陽乃はプリキュアへと変身する

デューク「風を司りし聖なる騎士！キュアデューク」

デューク「騎士の聖なる力が闇の中から光を拾う。ホーリーナイトプリキュア！」

ブルーム「先輩がプリキュアになっちゃった。！」

デューク「一気に決めるよ、きてハスラーロッド、シュートモード！」

デュークの目の前にデューク魔力で形成されたプールに３つの宝珠をおきそして構える

デューク「破邪聖獣球！、邪気退散！」とデュークの技が決まり、ウザイナーと暗闇

獣は消滅しウザイナーになった木の精は解放された。

デューク「それじゃ二人とも、お互い話したいこともあるだろうから家にいこっか！」

と3人は変身をとき陽乃の家に向かう

第１０話シルヴァの後輩フレッシュプリキュア、対面する二人はプリキュア

シルヴァは八重が陽乃が、プリキュアの後輩を家に連れてかえっている頃、四葉中学に入学し、その転入初日の放課後、八重と陽乃から今日は友達を連れていくからその子達の分もよろしくと言われ、今日の食事当番は自分であることに気付き、四葉町のスーパーに寄って買い物をして帰ろうと駅に向かった。

帰り道、ナケワメーケと言う怪物と一人の少女が待ちで暴れていた。

シルヴァはCブレスフォンをとりさけぶ

シルヴァ「キュアアクセスっは！、サモンセイント・オブ・ジ・アース」

グラディウス「百獣を司りし聖なる騎士キュアグラディウス！、さあ、晩御飯まで時間がないのさっさっと決めるわよ。」

グラディウス「プリキュアファルコンブレイク！」

とグラディウスは必殺技を放ちナケワメーケは浄化された。そして変身を人気のないところでときシルヴァは、

電車に乗り、自分の家に帰っていった、そしてそれから数分後、この街に住むプリキュ

ア、キュアピーチがタルトが駆けつけたのはそれから五分くらい後のことだった
。
タルト「あれっ、なんやいつの間にか終わってる。」
ピーチ「いったい誰が?」と言いながらもピーチは変身を時、タルトとともに家に帰宅した。
そしてやっとのことでホーリーナイトプリキュアの3人内二人は後輩プリキュアを連れて自宅のあるマンションに帰宅した。
先ず最初に帰宅したのはシルヴァだった。今日は大勢がくると聞いていたのですき焼きにでもしよう準備をしていると
陽乃「ただいま〜」と陽乃が帰って来た。
シルヴァ「おかえり、それで後ろにいる子達は」
陽乃「私達の後輩だよ。」
咲「こんにちは、日向咲って言います。」
舞「美翔舞です。」
シルヴァ「よろしく、今日はお泊まりしていくのよね。あまり豪華な歓迎は出来ないけどゆっくりしていってね。」とその時
八重「ただいま、っと、陽乃が見知らぬ二人を連れているということはもしかしてそ

の子達も？」
陽乃「そう言うことだね。そこの二人もよろしくねえっと？」
なぎさ「美墨なぎさです。」
ほのか「雪城ほのかといいます」と八重が連れてきた二人も挨拶をする。
八重「それじゃ私達のこともあるし説明会始めましょうか。」
と八重が言うと陽乃は二人が連れてきた四人に自分達のことを説明していく。
ほのか「それが先輩達がプリキュアになってからの経歴と言うわけですか。」
舞「そんな事が！」
と
なぎさ「その天空島って所にいってみたいかも。」
咲「私も！」
陽乃「それじゃ行ってみる。」
咲「行けるんですか。」
八重「そりゃ行けるけど。」
すると四人のポーチから４匹の妖精が出てくる。
メップル「パワーアニマルは妖精の守り神と言われるくらい神聖な生き物メポ」
ミップル「ミップル達もあってみたいミポ。」

フラッピ「フラッピもラピ」
チョッピ「チョッピもいきたいチョピ」
と八重達は部屋のクローゼットを開けそのなかに入っていく。
そしてなぎさ達もあとに続くそして天空島に移動する。
なぎさ「ここが天空島！」
咲「大空の樹と同じくらいざわざわ～ってしていい感じ」
舞「綺麗！」
ほのか「ほんとね。」
と八重と陽乃のCフォンがからパワーアニマルの姿のランドとミラが出てきた。
そして二人は咆哮を上げる。
メップル「此がパワーアニマル！」
ミップル「すごいミポ。」
フラッピ「感激ラピ！」
チョッピ「チョッピもチョピ！」
とそれから暫く色々とパワーアニマルを見せてから自宅に戻った6人はシルヴァの用意したすき焼きを囲み！、
天空島の温泉に浸かり今日は眠りについた。

第十一話グラディウス対イース!揺らぐイースの想い

なぎさや咲達とのお泊り会から数日、シルヴァの通う四葉中学に、四葉町に現れる謎の戦士プリキュアの噂が立っていた。

どうやらシルヴァの他に、プリキュアが四葉町にはいるらしい。

そしてつい先日シルヴァはそのプリキュアに遭遇してしまった。

そしてそのプリキュアと戦っていた。女の子になぜか知らないがプリキュアの敵としてかっては八重達と戦っていた自分が重なって見えた。

シルヴァ「まさかね」とその日は、家に帰宅した。

そしてまたある日、後輩の桃園ラブと何故か一緒に帰っていた。

シルヴァ「なんで私が」と呟きながら教師から渡された点検済みの課題を教室に運んでいるときにたまたまぶつかってしまい、課題を落としてしまったのを拾って貰うどころか運ぶのを手伝ってもらったりとしてもらったのでそのお礼をとドーナツをご馳走することになったのだ。

そして場面は先程に戻り、

ラブ「先輩、これから行くカオルちゃんのドーナツは本当に美味しいんですよ。だか

ら先輩も食べたらきっと幸せゲットだよ。」
シルヴァ「はいはい、桃園さん。ドーナツの前にまず目の前にいる人のことを片付けましょうか。」
とラブが前を、みるとそこには
ラブ「せつな！」
せつな「何度言えば解る私はイース！、ラビリンスの使徒」
せつなと呼ばれた少女はラブに殴り掛かる
シルヴァ「あなたが何者かは知らないが、私の後輩を虐めないでもらおうか。」とせつなの拳を受け止めたシルヴァはそう言った
せつな「どけ、私はそこの女にようがある」
ラブ「先輩！」
それでもどかないシルヴァをみて、せつなは拳を放し離れる
せつな「スイッチオーバー‼?」とせつなはイースへと変身する
シルヴァ「なるほどあなたとは何か近しいものを感じていたけど、そういうことね。」
イース「なんだと⁉?」
シルヴァはイースのその言葉を聞き
シルヴァ「あなた、迷ってるわね。」

イース「黙れ！、っ黙れ！」と攻撃を仕掛けて来る。
ラブ「先輩！、チェインジ！、プリキュアビートアーップ」
ラブはプリキュアに変身する
ピーチ「ピンクのハートは愛あるしるしもぎたてフレッシュキュアピーチ!!?」
するとシルヴァは自然と笑みがこぼれた。
シルヴァ「ありがと、桃園さん、でも今回だけは私に戦わせてね。」
シルヴァはCブレスフォンを取り出した。
シルヴァ「キュアアクセス！、ハァッ！サモンセイントオブジアース!!?!!?」
シルヴァはプリキュアに変身する
グラディウス「百獣を司りし聖なる騎士！キュアグラディウス!!?」
グラディウス「聖なる騎士の力が闇の中から光を拾う！ホーリーナイトプリキュア!!?」
ピーチ「嘘!!?!!?!!?」

第12話遭遇したの魔法使いとおまわりさん

私、比企谷八重と陽乃がプリキュアになって2年目のある日、私は陽乃に連れ出されて名目上はデートをしていた。
だがしかし私は悪魔の開いたワープホールに捕まり平行世界に転移してしまった。
そして私達は初めて天空島にきた時と同じように落ちていた。
八重「なんなのよ、私達ってどっかにワープするときは必ず落下しなきゃいけないわけ」
陽乃「はぁ、諦めよ八重、なんだかんだ言ってもこの前の異世界のプリキュアと戦ったときのいきとかえりも落ちてたじゃない。」
八重「そんな〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」
と言って2人は落ちていく。
　そして別次元の宇宙にある魔法の発達した世界ミッドチルダを
結目芳子は散歩がてらに歩いていた。
彼女は普段下宿している家の子供の面倒を見ているのだがその子供達も今日はジムで格闘技の練習があるとかで暇を貰っていたので芳子は

ミッドチルダを散歩しているのだったそして聖王教会近くの森に差し掛かるといきなり空から声が聞こえてきた。
八重「きゃぁぁぁ、どいてどいて！」
芳子「え、きゃあっ！」
どうやら一足遅かった。
芳子の上に八重が乗り、その上に陽乃が落ちてきた。
八重「陽乃、重い」
陽乃「失礼ね、八重」
芳子「おっ、重い」
八重・陽乃「「誰が重たいって、ゴラァー!!?！」」
芳子「ごめんなさい、ごめんなさい。それと貴女達は」
八重「なんか、デジャヴね、まあいいわ、私は比企谷八重」
陽乃「雪ノ下陽乃よろしくね。」
芳子「結目芳子です。」
するといきなり何かが、攻撃を仕掛けて来た
？「私はＳＷＰのサヤカ・Ｄ・クルーガーよ。そこの２人、許可なく平行世界の渡航による罪で貴女達を逮捕します。」

サヤカと名乗る女性が
八重達が事情を説明しようとするが聞く耳を持ってくれない
芳子「待ってください、話を、聞く限りお二人は悪くないじゃないですか。」
サヤカ「あまり民間人の貴女が口を出さないでいただきたい、それでも邪魔をすると言うなら」
とサヤカは懐からキュアライセンスを取り出す。
サヤカ「エマージェンシー、プリキュア‼?」
サヤカのキュアライセンスの起動により記憶魔法合金キュアメタル製のキュアスーツがサヤカを包み、世界と妖精を守る妖精界の法の番人、いや法の番犬へと彼女を変身させる。
キュアマスター「百鬼夜行をぶった斬る、地獄の番犬キュアマスター
このキュアマスターの刃の輝きを恐れぬならばかかってこい！」
芳子「プリキュア、ふん、そんなのに変身できたって全然すごくないんですからそれくらい私にもできます。」
芳子「だぁぁぁ！」
『ｂｒｅａｋ　ｏｐｅｎ！』
芳子「プリキュア、スタンドアップ！」

『ｒｅｌｏａｄ！』

『ＧｏＧｏ！ｓｔａｎｄ　ｕｐ　ｐｒｅｃｕｒｅ』

キュアリボンＰ「温良篤厚、春香る優しさの魔法！、キュアリボン　プリム」

八重・陽乃「「えぇぇぇぇぇぇぇ！やっぱりこれって何かのデジャヴ‼？‼？‼？‼？‼？‼？～～～～～～～～～～～～～～～ん」」

またまた転移、今度は別の世界に転移した。

芳子ちゃんとサヤカさんのパドルがひとしきり終えてなんとか、サヤカさんは冷静になり、2人は仲良くなり私達2人はサヤカさんの謝罪を受けていた。

サヤカ「すまない、本来ならこんなになる事はなかったんだが、大きな仕事の前で忙しかったからなすまない。」

八重「いえいえ、そんな誰にもそういうことはありますよ。」

サヤカ「そうか、すまないな。さぁ、早速だが君たち2人を元の世界に帰そう。」とサヤカが魔法陣を起動させる。

芳子「八重さん、陽乃さん、サヤカさんまたご一緒する時があったら一緒に戦いましょうね。」

八重「うん、なるべくその日が来ない日を願ってるよ。」

陽乃「またね！」と八重達の乗った魔法陣が起動して私達は元いた地球に転移するはずだった・・・・・

ところが

八重「なんでまた落ちてるの!!!!!」

サヤカ「それに此処は地球でもないようだ!!!!!」
陽乃「サヤカさんまで、巻き込まれてる!」
シルヴァ「なんで落ちてるの!!!」
八重「なんでシルヴァまで落ち!!!て来てるの!??」
サヤカ「ドギー、防御陣展開」
ドギー「オーケー。サヤカ」
とサヤカのキュアライセンスを下に向けると私達の真下に防御陣が展開されるそして着地に成功した。
そして私達4人は気を失っていたようで目が覚めると白い空間にいた。
八重「此処って?」八重達の目の前には4人のプリキュアの写真とあと1つ空白の額縁があり、その下にボタンが落ちている。
八重はそのボタンを押すとキュアウェザーというプリキュアが額には描かれていた。すると額の中を突き破ってキュアウェザーが出て来た。
ウェザー「貴女が私のチームメイト、よろしく私はキュアウェザー」
八重「よろしくっていうか、なんで私達こんな所に集められてるの。」
ウェザー「それは・・・」
陽乃「それは?」

サヤカ「それは？」
八重「それは？」
ウェザー「それは私にもわからない！」

八重・陽乃・サヤカ・シルヴァ「だぁぁぁっ」と勢いよくこけた。
ウェザー「冗談、冗談、ちゃんと説明するから」とプリキュア同士がチームを組んでプリキュアと戦うというのだ。
シルヴァ「馬鹿な、プリキュア同士で戦うだと、正義を守るために戦うプリキュア同士が戦うなどは愚の骨頂私はこの件降りさせてもらう。」
八重「まぁ、シルヴァ、おまえの許せない気持ちもわからないでもない、それなら、この馬鹿かたお祭りを企てた愚か者をあぶり出す為にこの戦いに参加して見ないか。」
シルヴァ「リーダーがそういうなら」と渋々承諾するシルヴァだった。

１４話

キュアグラディウスに変身したシルヴァによってイースを退けたシルヴァとラブ、シルヴァはラブをうちに連れて来た。
ラブ「先輩もプリキュアだったんですね。」とラブは自身のなさそうな顔で言う
シルヴァ「だいぶ、あのイースって子のことで悩んでるみたいね。」
ラブ「ハイ、私はセツナと最初は友達としてあったんです。でも敵だって知ったとき、とってもショックでした。」
シルヴァ「そっか、そうだ。私の話少し聞いてくれない。」
ラブはシルヴァが話すことを聞いて驚いた。
シルヴァは元々千年前の人間であり、プリキュアであったそれが敵のボスを倒す為に自分が邪悪なものになり敵を倒し、そして仲間の手によって封印されたのだが敵には生き残りがいて、シルヴァは利用されて、自分の後輩のプリキュアをその手にかけていたのだという。
そしてシルヴァは八重達により、呪いを解かれてプリキュアに再び変身して戦っている今にいたる。

プリキュアを戻る前は私は仲間になるには手を汚しすぎたと思いシルヴァは天空島を去ろうとした時にシルヴァが受けていた呪いが怪物化した物と戦い今に至ること
ラブ「先輩は辛くなかったんですか。千年も眠ってたり、プリキュアを何人も殺しちゃうったらした」
シルヴァ「そりゃ辛いさ、でも何よりも私は昔の仲間に救われ、今の仲間に救われて此処にいる、1人で抱え込まず、仲間を頼れ」
ラブ「でも、」
シルヴァ「大丈夫だ。もしもの時は私も助けてやるから」
ラブ「先輩！」
シルヴァ「さぁ、八重や陽乃もまだ帰ってこないし、晩飯を食べていけそのあとは私が送ろう」
そしてシルヴァは台所に立とうと席を立つと
「ピンポーン！」
シルヴァ「ラブ、少し待ってて」
シルヴァが玄関に行き、玄関を開けると
美希「あんたが、ラブを攫った張本人ね。」
恐らくラブのプリキュアとしての仲間の2人とぬいぐるみのような赤ちゃんと何故

かフェレットがいた。
シルヴァ「私がラブを攫った⁉?、誤解だ、落ち着いてくれ。」
祈里「そうだよ、美希ちゃん、落ちついて」
ラブ「あぁ、美希たん、ブッキー!」
シルヴァ・美希・祈里「「ラブ（ちゃん）」」

ラブの説明と途中帰って来た、八重と陽乃によりなんとかこの場を収め誤解を解くことができた。
美希「すいませんでした。」
祈里「でも、私もびっくりしました。私達の他にプリキュアがいたなんて」
ラブ「タルトは知ってたの?」
タルト「パワーアニマルの伝説くらいは知ってたけど、まさかプリキュアがあったのは知らんかったな。」
・・・夕食を食べてラブ達にも天空島を見せて今回は解散になった。

第15話

八重達はつい先日の超オリキュア大戦を終えて帰ってきた。
そして今日は陽乃やシルヴァと買い物に来ていた。
陽乃「やぁ、まさかあんなにプリキュアが生まれてたなんて、それに」
八重「えぇ、まさか小町が狼鬼と一体化して、プリキュアになってたなんて」
シルヴァ「しかし、狼鬼の力は感じてもそれらしき意思は感じなかった。やはり、完全に小町と一体化している。小町が狼鬼になっているのほうが正しいのか。」
陽乃「それにしても八重が変身したキュアグリーンだっけ、かわいかったね。」
八重「そうかしら、いつものやつと違ったから恥ずかしかったのだけど」
陽乃「そうかな、私はそうは思わないけど」
シルヴァ「そういえばそろそろ私達も中学卒業ね。」
陽乃「世界が変わった影響で中学もバラバラになったけど高校は一緒のところに受かってよかったね。」
そう3人は私立明堂院学園高等部に編入が決定しているのだ。
今日は新居を移す為にマンションを見つけたので今いるマンションから新しいマン

ションの部屋を買いに出かけてそしてその帰りである。
それから一年後
私達は希望ヶ花市に来てから一年がたち、今日は久しぶりに悪魔が私達の前に現れた
その相手は
小町「久しぶり、お姉ちゃん！」
八重「小町。」
小町「やあ、あの変な大会の時以来だね。小町もね、プリキュアになったんだよ、狼鬼と１つになってね。今は私が狼鬼、狼鬼が小町なんだよ。」
陽乃「八重！、シルヴァ行くよ！」
３人「キュアアクセス！っは！、サモンセイント・オブ・ジ・アース」

パラディン「光を司る聖なる騎士！、キュアパラディン！」
デューク「風を司る聖なる騎士！、キュアデューク！」
グラディウス「百獣を司る聖なる騎士！、キュアグラディウス」
パラディン「聖なる力で！」
デューク「闇の中から光を拾う！」
３人「ホーリーナイト！プリキュア！」

小町「プリキュア、ダークアップ」
フェンリル「闇の力で支配する、暗黒の神狼、キュアフェンリル」
フェンリル「さぁ、お姉ちゃん！、一緒に魔界に行こう。」
パラディン「お断りよ、小町、貴方の目を覚まさせてあげる。」
フェンリル「それじゃ、お姉ちゃんがちゃんと付いてくるように調教しないとね。私だけを見るように、そこのレズ女と裏切りものを殺してね！」とフェンリルの周りに暗闇獣の魔法陣が展開されるそこから無数の狼の暗闇獣が現れた。
フェンリル「さあ、我が子達よ、私とお姉ちゃんの邪魔になる2人を殺せ！」
とフェンリルの呼び出した狼型暗闇獣の群はデュークとグラディウスに襲いかかる。
パラディン「デューク、グラディウス！」
デューク「パラディン、なんとか私達でこの群を片付けるから、パラディンはフェンリルをなんとかして！」
グラディウス「頼むぞ！」
フェンリル「始めようか、お姉ちゃん！」
は魔法陣を手に纏わせると狼の意匠を施した剣が現れた
パラディン「フェンリル、いや、小町絶対に救ってみせる！」

パラディンも、破邪聖断剣と獣皇剣を両手に持ち構える。
パラディン「はぁっ！」
フェンリル「やぁぁぁっ！」
と激しい剣戟が続く
一方デューク達の方では
デューク「ムーンスラッシュ！」
グラディウス「ファルコンブレイク！」
暗闇獣を自分達の必殺技で次々と狼達を倒して行く、
一体、また一体と倒して行くが中々数が減らない。
すると
？「プリキュアシルバーフォルテウェーブ！」
デュークとグラディウスが見るとそこには
デューク「貴女は、？」
ムーンライト「キュアムーンライトよ」
グラディウス「すまない、助かった。」
ムーンライト「どうやら砂漠の使徒とは違うみたいね。」
とムーンライトは去って行った。

デューク「砂漠の使徒？」
グラディウス「どうやら、あのプリキュアも私達とは別の敵と戦っているようだ。」
デューク「パラディンのところに急ぐよ。グラディウス！」
グラディウス「あぁ！」
２人はパラディンとフェンリルの下に走った。
パラディン「くっ！」
パラディンはフェンリルの一撃を受けた。
フェンリル「やぁ、お姉ちゃん強いね！、小町、興奮して来ちゃった
行くよ。プリキュア！、ダークハウリング！」
とパラディンの体に音と邪気を纏った掌底を食らわす。
パラディンは吐血した。
フェンリル「これ、本当だったら、内側からパァーンってなる技なんだけど、お姉ちゃんがそうなるのはやだから手加減してあげるたよ。あっ！、今の小町的にポイント高い！」
パラディン「高くないわよ！」パラディンは立ち上がり破邪聖断剣を構える
フェンリル「それじゃ、次はお姉ちゃんが気絶するぐらいの威力でいくね。」
フェンリル「プリキュアダークハウリング！」

パラディン「破邪聖断剣！、邪気退散！」と光を纏った破邪聖断剣と
ダークハウリングがぶつかり合うそして２人とも吹っ飛んだ。
フェンリル「やぁ、流石だよ。お姉ちゃん、さぁーデューク「パラディン！」ちっ！」
パラディンの下にデュークとグラディウスが合流した。
フェンリル「なんなのあんたはいっつも、いっつも小町の邪魔ばっかりして！」
デューク「パラディンの恋人よ！」と
フェンリルに武器を向けるデューク
フェンリル「あんたは、絶対殺す！、お姉ちゃんとの仲を邪魔する奴は全員」と言い
残し魔法陣を展開し、転移していった。
気絶したパラディンを担ぎ、マンションに運び込む２人なのだった。

16話

キュアフェンリルの戦いにより、意識を失った八重は夢を見ていた。
クロノスとの戦いから使えなくなったキュアゴットの力を夢の中で確かに感じていた。
そして目が覚めると、

八重「ここは?、うちのマンションの部屋か」と
取り敢えず着替えようとベットからでようとするといきなり真上から
龍璃「きゃぁぁ!」と私の上をなんと覇波龍璃ちゃんが私のお腹の上に落ちて来たのだ。

八重「いったぁぁぁい!」
陽乃「八重!、どうしたの?」と陽乃が入ってきた。
シルヴァ「何事だ。」
龍璃「えっ!、八重さん⁉?」

八重「龍璃ちゃん、なんでここに！」
龍璃「不思議な穴を通ってきたら、何故か落ちて気づいたら八重さんの部屋に」
陽乃「何かとっても、心当たりのある話ね。それ」
八重「うん、確かに私達が世界を移動する時に出てくる穴だね。でも
落ちてくる高さ違くない！」
龍璃ちゃんはゲストなので
陽乃「私達扱いのひどさ！」
シルヴァ「まぁ仕方ないな。」
そして八重はあの穴を通ると自分の役目を果たすまで帰ることができないことを説明した。
龍璃「それじゃ、しばらくこの世界で住まなきゃいけないんですか。それでここの地名ってなんですか。」
八重「希望ヶ花市よ。」
龍璃「えっ、ハートキャッチプリキュアの世界？」
八重はここは基本的にオールスターズ次元の世界と八重達の世界が混ざった世界であり、それは自分達の力が原因で、この世界でブラックやピーチなどの原典の世界のプリキュアが生まれてしまった。

自分達の戦っていた悪魔と原典の世界のプリキュアの敵達が手を組んでいる。
確認できているだけで、ダークフォール、ドツクゾーンなどで暗闇獣が確認されていて、他のプリキュア達と暗闇獣が戦う時に共闘して戦っている。
だがプリキュア達も日に日に腕を上げていて暗闇獣を相手取るにも充分な実力を身につけ初めているので自分達の戦いに専念する為にこの街に引っ越してきたのだが、案の定この街にもプリキュアがいた。
そして砂漠の使徒という敵と戦っているらしいとのこと
龍璃「そんなことが、わかったわ、私も協力します。私も戦います。」
八重「よろしくね。龍璃ちゃん。」
陽乃「よろしく！」
シルヴァ「よろしく頼むぞ。」４人は決意を新たに悪魔との戦いに臨む４人なのであった。
次回カオス対フェンリル
次回カオスの登場にまた邪魔者の登場かと怒る小町の魔の手がカオスに理不尽に負けるなカオス、たてカオス
小町は絶対お姉ちゃんと●●●●するんだからね！

１７話カオス対フェンリル

　覇波龍璃が此方に来た翌日、私比企谷八重と陽乃、シルヴァ、龍璃の４人は龍璃の日用品を揃えるために最近オープンしたショッピングモールに来ていた

龍璃「それじゃ、八重さん達も良くここで買い物をしているわけではないんですね。」

八重「そうね、希望ヶ花市に来て１年以上経つけど此処に来たのはあまりないのよね。」

陽乃「八重はそうでもないけど、私は咲ちゃん達と何回か来た事あるよ！」

八重「いつの間に」

龍璃（やっぱり、八重さん達の他のプリキュア達、しかもオールスターズのプリキュア達の世界が混ざりあった世界なんて）

八重「・・・・・っり・ゃん、・・・りちゃん！、龍璃ちゃん！」

龍璃「はっ、はい！」

陽乃「うん、揃える物は一通り買えたし、そろそろお昼にしようか。」

龍璃「はい。」

そしてショッピングモールのレストランで食事をしていると世界は毎度、毎度の事ながら世界は紫色に包まれた。
龍璃「これは、バッドエンド空間？」
八重「いえ、これは悪魔の持つ闇の結界、結界内の相手の負の感情と精神エネルギーを吸い取ることで悪魔の親玉、魔王を蘇らせるのが目的よ。」
シルヴァ「龍璃への説明も済んだことだし、行くぞ！」
八重「えぇ、変身よ！」
陽乃・シルヴァ・龍璃「ああ、（うん）、（はい！）」
八重・陽乃・シルヴァ「キュアアクセス！っは！、サモンセイントオブ・ジ・アース」
龍璃「プリキュア、カオスリンク！」
パラディン「光を司りし、聖なる騎士キュアパラディン！」
デューク「風を司りし、聖なる騎士キュアデューク！」
グラディウス「百獣を司りし、聖なる騎士キュアグラディウス！」
カオス「宇宙を統べる混沌の覇者！、キュアカオス！」
パラディン「聖騎士の聖なる力が！」
デューク「闇の中から光を拾う」
グラディウス「ホーリーナイト！」

パラディン・デューク・グラディウス「プリキュア！」
パラディン「さて、今回は誰が来るのか、アモンあたりが来てくれたら楽でいいな。」
デューク「また、そんなこと言ってるとあの子が来ちゃうでしょ！」
グラディウス「あまり考えたくないがな」
小町「アモンとか、リリス様だと思った、残念！お姉ちゃんの妹、兼恋人の比企谷小町ちゃんでした。さぁ、お姉ちゃん私と●●●●しよ！」
カオス「誰？」
パラディン「私の妹よ」
小町「また、お姉ちゃんの周りに女の子が、変な虫がついてる。
デューク「あまり思い出したくないかもしれませんけど、彼女が何者なのかもわかるよ。」
小町「プリキュア、ダークアップ」
フェンリル「闇の力で支配する、暗黒の神狼キュアフェンリル」
カオス「キュアフェンリル⁉？」
フェンリル「思い出した、あの変な大会の時の優勝者、幸せそうな顔して、許せない、ぶっ潰してあげる。」